

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
木田 優子

作成日 2024年1月29日

1. 教育の責務

2018年(平成30年)度から弘前学院大学看護学部・看護学科に採用され、本年(2024年)で7年となる。

主に小児看護学実習を担当している。

その他 国家試験対策委員会(3年)、リカレント委員会(5年)、そして2023年度はオープンキャンパス模擬講義(子どもの発達をふまえたおもちゃを作成してみよう!)を行った。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
健康づくり実習 I	1年	実習	前期	早期体験実習、地域住民の生活を知るための実習
基礎看護学実習 II	2年	実習	前期	入院患者の看護過程の実践
小児看護方法論	2年	講義	後期	症状別看護(2023年度から一部担当)
小児看護援助論	3年	講義 演習	前期	呼吸器、消化器、また循環器疾患患児の演習
小児看護学実習	3~4年	実習	通年	小児看護(健康又は病気のこどもと家族を対象とした看護)
看護統合実習	4年	実習	前期	課題探求型の実践的な看護学実習

2. 教育の理念

看護師は一人の人として豊かな感性を持ち、他者への思いやりと配慮が必要であると考え、「他者ともに自己も大切にできる」を初学者である学生の育成の教育の理念と目的とする。

指導観として具体的には、学生の思考を理解できるよう努める。まず、学生に関心を持つ、そして考え方の違いを認めることが必要である。人の行動には必ず何か意味があり、適応するための行動がある。そのため、その行動1つ1つを否定するのではなく、まずは把握し、その上でなぜその行動が起きているのか考えることが大切である。そのためには、学生自身が考え・思いを教員に話すことのできる雰囲気づくりを心掛けている。

小児看護学実習においては、病気や障がいをもつこどもだけではなく、健康なこどもと関わる。しかし、現代の少子化、きょうだいが少ない、核家族の増加などから、学生はこどもや家族と関わる機会が少なく、また、コミュニケーション能力の変化により他者との関わりが希薄となってきた。そのため、学生が対象であるこどもや家族に関心を持ち、接することができるよう、関わりとしては学生の現在の思いや考えを聞き、個々に合った助言や指導を行う。実習では、対象者の安全・安楽な看護実践が求められる。そのため、学生が根拠をもって実践ができ、知識・技術・態度を身につけられるようにする。また、学生と臨地の指導看護師との橋渡しとなるよう、指導看護師への報告・連絡・相談を密に行い、学生個々に合った指導がされるよう調整する。

3. 教育の方法

私の担当は主に小児看護学実習（病院）であり、5日間の実習で看護過程の展開を行い、病気のこどもとその家族の理解を深める。

まずは、関連する講義の目的・内容を把握し、学生が実習前から講義内容を想起・習得できるようにした。そして、個々の学生の学習内容を確認し、知識を深められるようにした。また、学生の個々の状況把握に関しては、今までの他領域実習の状況を学生自身から聞き、現在の課題が明確になるようにした。

臨地実習では、急性期から回復期または慢性期の患児に関わる。小児の特性と、実習期間が短いことから、実習前から体調管理と感染予防には特に留意するよう指導した。

学生は、受持ち患児のアセスメントをタイムリーに行うことが難しく、後追いで患児理解になりやすい。そのため、学生が毎日の援助の結果及びアセスメント、振り返りを丁寧に行うことができ、翌日の課題を明確にし、達成感を持つことができるような学生への助言を心がけた。また、学生が今までの講義・演習の学習内容を想起できるような発問を行い、学習内容を確認しながら患児の発達段階、症状、状態に合わせたケアの根拠と必要性が理解できるよう助言した。指導看護師へは、学生個々の状況、疑問や不安を伝えることで、指導看護師から個々の学生に合った助言・指導がされ、学生は患児の個別性の理解につなげることができた。

コロナウイルス感染予防により学内実習となった際の工夫としては、臨地実習の1日の流れに沿って、患児はモデル人形を用い、家族及び指導看護師役は教員が行い、臨地実習に近い形での学内実習とし、緊張感を持たせた。シミュレーション教育による学生が実践した場面の振り返りでは、録画をみながら学生に自身の行動を客観的に観察し、援助の振り返りを教員と一緒にすることで、翌日に活かし、達成感を持つことができるような関わりを心がけた。このことにより、対象者である患児・家族の視点に立ち、実践に繋げることができた。

4. 教育の成果

1. 小児看護学実習評価（回答率63.1%）

全ての設問において、学部平均値よりも高い評価を得ることができた。

2. 小児看護学実習（病院）後の学生アンケート内容（自由記載）

- ・自分自身の課題が見え、看護師や教員からの指導や患児・家族の協力もあり、学びが得られた。疾患のある患児と家族のイメージがわからなかったが、看護師や教員の関わりを見て、コミュニケーションの取り方が分かった。
- ・事前練習では、実際の場面を想定した演習を行う必要性がわかった。
- ・小児は成人に比べて未発達な部分が多く、成人に比べて基準や気を付けることが多く、自身の知識不足と関わり方の難しさを感じた。
- ・エビデンスに基づいた学習を継続する。
- ・記録物が多くて大変だった。

5. 教育の改善

設問5：シラバスに記載された到達目標を達成できると思う

→コロナウイルス感染の影響を受け、学内実習が多かったが、到達目標に達成できたと学生が感じることはよかったと考えている

設問8：学生の理解度や反応を考慮して授業を行っている

設問9：教員は、学生の質問や意見に適切に対応している

→今後も学生のつまずきに気づき、対応できるよう関わっていく

引き続き、学生の実習前・中の体調管理が行えるように助言を続け、また、学生のレジリエンスの把握をしっかりと行い、個々の学生の状況にあった助言・指導を継続できるよう、学生が話しやすい、そして質問しやすい雰囲気づくりを心掛ける。

記録物に関し、学生が短い実習期間の中で、患児・家族を理解し、看護過程展開できるよう内容の検討を考えている。

6. 教育の目標

短期的には、こどもと関わる機会の少ない学生が、援助をするこども・家族のイメージがつくよう、講義内の演習から具体的に助言していく。

長期的には、教員として、まずは自分自身が物事を多角的に見ることができるよう、物事の考え方は1つではないことをふまえ、学生の意見や思いをまずは聴き、受け入れることを、これからも心がけていく。そして、学生と共に学び、育つことができるよう、学生の意欲の向上を妨げず、大切な内容は理解できるように、学生の反応や理解度を確認しながら助言をしていく。

今後、講義を行う際、講義は一方的になりやすい傾向があることから、学生が参加し一緒に学べる講義を組み立てられるようになることを目指す。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 小児看護学実習アンケート（自由記述）
4. 授業改善書（小児看護学実習）